完全主義と選択的注意における定位バイアス・ 解放困難バイアスとの関連^{1,2}

坪田 祐基 愛知学泉大学 石井 秀宗 名古屋大学

Relationships of perfectionism with selective attentional engagement and disengagement biases

Yuki Tsubota (Aichi Gakusen University) and Hidetoki Ishii (Nagoya University)

This study aimed to investigate relationships between perfectionism and selective attentional engagement and disengagement biases to success- and failure-related words. Seventy-five undergraduates (33 male and 42 female) were asked to perform modified dot-probe tasks and to complete items in the Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale. The modified dot-probe tasks contained four kinds of stimuli such as success-related words, failure-related words, neutral words, and non-words. Using this task, selective attentional engagement and disengagement biases to success- and failure-related words were measured. Pearson's product-moment correlation coefficients between the selective attentional bias and perfectionism scale scores were observed. As a result, several relationships were found in males: personal standards positively correlated with disengagement bias to failure-related words; concern over mistakes positively correlated with engagement bias to failure-related words; and doubting of actions positively correlated with engagement bias to success-related words. These results suggest that male perfectionists have selective attentional engagement and disengagement biases to success or failure, and that each dimension of perfectionism is related to engagement bias and disengagement bias differently.

Key words: perfectionism, attentional bias, engagement, disengagement, modified dot-probe task.

The Japanese Journal of Psychology

2019, Vol. 90, No. 2, pp. 137–146

J-STAGE Advanced published date: December 25, 2018, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.17064>

物事に対して、完全な成果を求めて努力することは、一見望ましいことであるかのように思える。また、結果として高い評価や成果を得ることに繋がる場合もある。しかし、このような完全性をどこまでも追求める性向は「完全主義」という用語で定義されており (Flett & Hewitt, 2002)、抑うつや不安障害、摂食障害、自殺傾向、アルコール依存、心身症などの様々な生理的・精神的問題との関連が指摘されている (Flett,

Hewitt, Blankstein, & Mosher, 1991)。

近年、完全主義者が行う選択的注意の特異性が注目されている。その発端は、臨床的な観察から不適応的な完全主義者を記述した Shafran, Cooper, & Fairburn (2002) の研究である。Shafran et al. (2002) は、不適応的な完全主義者の特徴を、認知スタイルを中心に記述し、完全主義者の極めて高い基準に対する過度の依存を維持させる要因として、「失敗恐怖」、「二分法的な目標設定」、「バイアスのかかった評価」、「自己批判」、「目標の再高揚」、「失敗への選択的注意バイアス」を挙げた。この中でも、失敗への選択的注意バイアスは、失敗したできごとや側面ばかりを物理的な現実から抽出させ、失敗に満ちた主観的な現実を構成させるものである。バイアスのかかった目標設定や評価などの認知や行動は、選択的注意によって歪められた主観的な現実をもとに行われる。そのため、失敗への選択的注意バイアスは、他の要因よりも上位に位置すると考え

Correspondence concerning this article should be sent to: Yuki Tsubota, School of Contemporary Management, Aichi Gakusen University, Shiotori, Ohike-cho, Toyota 471-0058, Japan. (E-mail: tsubota.psycho@gmail.com)

¹ 本研究は、科学研究費補助金 (特別研究員奨励費、課題番号 26・10337) の助成を受けて実施された。

² 本研究の結果の一部は、日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会 (2017) にて発表された。

られ, Shafraan et al. (2002) が取り上げた完全主義者の抱える問題の中でも, 特に根幹をなすものである (坪田・石井, 2017)。

Frost et al. (1997) は, 完全主義と選択的注意の関連を自己報告式の評定尺度を用いて検討した。だが, 選択的注意が自動的で, 無意識的なものであるという性質 (Mathews, 1990) を考慮すると, 完全主義者の選択的注意を検討するためには, 自己報告ではなく, より統制された実験場面での認知行動実験パラダイムを用いる方が適切であると考えられる (坪田・石井・野口, 2016; 坪田・石井, 2017)。

認知行動実験パラダイムを用いた研究としては, Lundh & Öst (1996) や Kobori & Tanno (2012), 坪田他 (2016), 坪田・石井 (2017) がある。Lundh & Öst (1996) や Kobori & Tanno (2012) は, 情動ストループ課題 (Mathews & MacLeod, 1985) を用いて, 完全主義と脅威語や失敗関連語への選択的注意との間に関連を見出した。また, 坪田他 (2016) や坪田・石井 (2017) は, 選択的注意バイアスを測定する課題として情動ストループ課題より適切なドット・プローブ課題 (MacLeod, Mathews, & Tata, 1986) を用い, 男性の完全主義者のみが課題に関連した成功関連語・失敗関連語に対して選択的注意を行うといった, 完全主義と選択的注意バイアスとの関連に性差が見られることを示唆した。これらの研究から, 完全主義者が特異な選択的注意を行うという Shafraan et al. (2002) の臨床的な観察は, 実証的に支持された。また, 失敗だけでなく成功に対しても選択的注意バイアスが見られること

や, 完全主義者の選択的注意バイアスに性差が見られることも, 認知行動実験パラダイムを用いた実証研究は明らかにしてきた。

しかし, これらの認知行動実験パラダイムを用いた研究には, 注意における定位過程 (対象に注意を向ける過程) と解放過程 (対象から注意を外す過程) を弁別して測定しておらず, 両者を混同してしまっているという問題点がある。Posner (1980) の空間的注意のモデルでは, 注意における定位過程と解放過程は区別され, それぞれ異なる過程であるとされている。また, 実際に定位過程は視床枕核, 解放過程は下部頭頂葉といった異なる脳部位の活動と関連していることが指摘されている (Posner & Petersen, 1990)。日常場面においても, 失敗した物事に注意が向きやすいこと (定位過程における注意バイアス: 以下, 定位バイアスとする) と, 失敗した物事から注意をそらすことが困難であること (解放過程における注意バイアス: 以下, 解放困難バイアスとする) は異なった状態であると考えられる。本来は異なるものである定位バイアスと解放困難バイアスを混同した場合, 完全主義と選択的注意バイアスとの関連を適切にとらえられない可能性がある。そのため, 定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定し, その上で完全主義者が持つ選択的注意バイアスが定位過程・解放過程のいずれかに見られるのか, あるいは両方で見られるのかを検討する必要がある。

そこで, 本研究では, 定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定できる修正ドット・プローブ課題

Figure 1. 修正ドット・プローブ課題のシーケンス例。

(modified dot-probe task: Rudaizky, Basanovic, & MacLeod, 2014) を用い (Figure 1), 完全主義と定位バイアス・解放困難バイアスとの関連を検討する。

修正ドット・プローブ課題の手続きは、以下の通りである。はじめに、画面の左右にある黒い正方形の枠の中のいずれかに、赤色の注視枠が呈示される。実験参加者は、注視枠を見るように教示される。その後、注視枠内に手がかり刺激として赤色の線分が地面と水平、あるいは垂直に呈示され、実験参加者はその方向を記憶する。そして、刺激語として、有意味語と無意味語つづりが左右に対呈示される。最後に、標的刺激として、画面の左右いずれかに赤色の線分が、地面と水平、あるいは垂直に呈示される。実験参加者は、先に呈示された手がかり刺激と標的刺激の方向が一致しているかをキー押しで回答し、標的刺激が呈示されてから、回答するまでの反応時間が測定される。この課題では、手がかり刺激を記憶していないと回答ができないため、実験参加者ははじめに、注視枠の方に必ず注意を向けている。そして、有意味語が呈示される位置によって、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定することが可能である。具体的には、注視枠と反対の位置に有意義語が呈示される条件 (定位条件) では、その有意義語への定位バイアスを持つ場合、標的刺激が有意義語の位置に呈示される場合には反応が早く、反対の位置に呈示される場合には反応が遅くなる。注視枠と同じ位置に有意義語が呈示される条件 (解放条件) では、その有意義語からの解放困難バイアスを持つ実験参加者が、同様の傾向を示す (Grafton, Southworth, Watkins, & MacLeod, 2016)。

ドット・プローブ課題と修正ドット・プローブ課題の最大の相違点は、はじめにどこに注意を向けているかを明確にできる点である。ドット・プローブ課題では、試行ごとに画面の中心の注視点に注目するように教示されるが、実験参加者が実際にどこを注視しているかははっきりしない。一方、修正ドット・プローブ課題では、はじめに注視枠の次に呈示される手がかり刺激に注目し、注意を向け、記憶しないと正答することができない。その上で、注視枠と反対に有意義語を呈示し、そちらに注意が向くかを測定する条件 (定位条件) や、同じ位置に有意義語を呈示し、そのまま注意し続けるのかを測定する条件 (解放条件) を設けることによって、注意がどのように移り変わるかを試行ごとに明らかにすることができる (Rudaizky et al., 2014)。

本研究では、修正ドット・プローブ課題を用いることによって、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定し、成功関連語・失敗関連語への定位バイアス・解放困難バイアスと完全主義との関連を検討することを目的とする。

なお、本研究では、桜井・大谷 (1997) が作成した

多次元自己志向の完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: 以下, MSPS とする) を用い、完全主義を測定する。MSPS は、Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990) の Frost Multidimensional Perfectionism Scale を参考に作成され、完全主義を多次元的にとらえ、適応に影響しない側面、適応的な側面、不適応的な側面を想定したものである。具体的には、「完全でありたいという欲求 (完全性欲求)」は自己志向の完全主義の基本的な特徴ではあるが、適応とは関連が見られず、「自分に高い目標を課する傾向 (高目標設定)」は適応的な、「ミス (失敗) を過度に気にする傾向 (失敗懸念)」と「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向 (行動疑念)」は不適応的な側面である。MSPS を用いることによって、適応に異なる影響を与える完全主義の各側面と、成功関連語・失敗関連語への定位バイアス・解放困難バイアスとの関連を検討することが可能となる。

本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1 適応に影響しない側面である完全性欲求は、定位バイアスとも解放困難バイアスとも関連を持たない。

仮説 2 適応的な側面である高目標設定は、成功関連語への定位バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説 3 不適応的な側面である失敗懸念は、失敗関連語への定位バイアスと、解放困難バイアスとの間に正の相関を持つ。

仮説 4 不適応的な側面である行動疑念は、失敗関連語への定位バイアスと、解放困難バイアスとの間に正の相関を持つ。

なお、本研究では、男女別に分けた分析を行う。坪田・石井 (2017) においては、男性でのみ完全主義と選択的注意バイアスとの関連が見られ、女性では見られなかった。しかし、坪田・石井 (2017) では、定位バイアスと解放困難バイアスとに弁別することなく混同して測定しており、そのことが問題となって、女性の完全主義傾向と選択的注意バイアスとの関連が見られなかった可能性がある。そのため、定位バイアス・解放困難バイアスを弁別してより精緻に測定し、その上で女性の完全主義傾向との関連を検討することによって、女性の完全主義者が本当に選択的注意バイアスを示さないのか、2種類のバイアスを混同して測定したために関連が見られなかったのかを検討する。

方 法

本研究では、修正ドット・プローブ課題を用いて、完全主義関連語 (成功関連語・失敗関連語) への定位バイアス、解放困難バイアスの度合いを測定する。また、質問紙により、完全主義を測定し、両者の関連を検討する。

実施時期

2016 年 10 月から 2017 年 10 月にかけて実験を実施した。

実験参加者

日本語を母語とする大学生 75 名（男性 33 名、女性 42 名）が参加した。平均年齢は 19.28 歳（ $SD = 0.91$, range 18—23）であった。

選択的注意バイアスの測定

実験課題 完全主義関連語に対する定位バイアス・解放困難バイアスの測定には、修正ドット・プローブ課題を用いた。修正ドット・プローブ課題の手続きは、Rudaizky et al. (2014) ならびに Grafton et al. (2016) を参考にした。

各試行では、画面の左右に 80×80 mm の黒線の枠を呈示すると同時に、左右いずれかの黒線の枠内に 20×20 mm の赤線の注視枠を 1,000 ms 呈示した。なお、黒線の枠、ならびに注視枠の中心は、画面の中心から、左右にそれぞれ 115 mm 離れた位置に呈示された。次に、注視枠内の中央に手がかり刺激として 5 mm の赤色の線分を 200 ms 呈示した。そして、黒線の枠、注視枠、手がかり刺激を消去すると同時に、刺激語を 1,000 ms 対呈示した。なお、刺激語の中心の位置は、黒線の枠、注視枠と同様に、画面の中心から、左右にそれぞれ 115 mm 離れた位置であった。最後に、刺激語を消去すると同時に、標的刺激として、手がかり刺激と同様の 5 mm の赤色の線分を呈示した。標的刺激は、実験参加者が回答するまで呈示された。なお、回答から次の試行が始まるまでの時間は、1,000 ms であった。

本研究では刺激語の呈示時間を 1,000 ms の 1 種類に設定した。Rudaizky et al. (2014) は、刺激画像の呈示時間に 500 ms と 1,000 ms の 2 種類を用いていたが、この方法を用いると、試行数を 2 倍にする必要がある。本研究は Rudaizky et al. (2014) が行った実験に比べ、刺激の種類が多く、2 種類の呈示時間を用いると、実験参加者の負担が極めて大きくなり、倫理的な問題、ならびに測定の信頼性の問題が生じる。本研究と同様に刺激語を用いて修正ドット・プローブ課題を行った Grafton et al. (2016) において、500 ms ではなく、1,000 ms を用いて測定する方がより良いと示唆されたため、本研究では 1,000 ms を刺激語の呈示時間として採用した。

今回の実験では、地面と水平、あるいは垂直に呈示された手がかり刺激と標的刺激の方向が一致していた場合には、“J” のキーを右手の人差し指で、一致していなかった場合には、“K” のキーを右手の中指で押すように教示した。キー割り当ては、Rudaizky et al. (2014) の実験において、マウスが用いられていたこ

とを参考に設定された。なお、実験参加者全員が、普段マウスを右手で使用していることを確認した。

刺激語 対呈示される刺激語には、成功関連語（ポジティブな完全主義関連語：「成功」、「正解」、「達成」、「勝利」、「成就」、「成果」、「承認」）、失敗関連語（ネガティブな完全主義関連語：「失敗」、「間違い」、「過ち」、「不備」、「しくじり」、「不成功」、「過失」）、中性語（「空気」、「温度」、「鉛筆」、「天気」、「新聞」、「地図」、「家具」）、無意味つづり（「ヌヨ」、「ヌネ」、「ロヌ」、「レヘ」、「ルユ」、「ホハ」、「ヘユ」）の 4 種類が用いられた。

成功関連語、失敗関連語、中性語は、坪田・石井 (2017) のものを用いた。無意味つづりは、梅本・森川・伊吹 (1955) を参考に、無連想価が 70—85 のものを選定した。言葉の使用頻度を示す一般語彙レベル（松下, 2011）は、成功関連語が 3,000—10,000 語、失敗関連語が 1,000—19,000 語、中性語が 400—5,000 語の範囲であった。それぞれの語彙レベルの範囲は、カテゴリ間で重なりを持っているため、著しく使用頻度が異なっていないと考えられる。また、田島・佐藤・橋本・松下・笹尾 (2016) が、日本人大学生を対象に使用頻度 30,000 語レベルで語彙量を測定したところ、天井効果が見られ、一般の日本人大学生にとって、30,000 語レベルでも日常的に理解することが容易であることが示唆されている。そのため、今回使用した刺激語は、日本語を母語とする実験参加者にとって、十分に馴染みのあるものであると考えられる。

呈示条件 有意味語（成功関連語、失敗関連語、中性語）は、常に無意味つづりと対呈示された。また、注視枠とは反対の位置に有意味語が呈示される定位条件と、注視枠と同じ位置に有意味語が呈示される解放条件があった。さらに、有意味語側に標的刺激が呈示される一致条件と、無意味つづり側に呈示される不一致条件があった。そのため、「成功 - 定位 - 一致条件」、「成功 - 定位 - 不一致条件」、「成功 - 解放 - 一致条件」、「成功 - 解放 - 不一致条件」、「失敗 - 定位 - 一致条件」、「失敗 - 定位 - 不一致条件」、「失敗 - 解放 - 一致条件」、「失敗 - 解放 - 不一致条件」、「中性 - 定位 - 一致条件」、「中性 - 定位 - 不一致条件」、「中性 - 解放 - 一致条件」、「中性 - 解放 - 不一致条件」の 12 条件があった。

試行数 12 条件それぞれについて 16 試行、計 192 試行がランダムに行われた。

質問紙尺度

実験参加者は、桜井・大谷 (1997) の作成した MSPS に回答した。MSPS は「完全でありたいという欲求（完全性欲求）」、「自分に高い目標を課する傾向（高目標設定）」、「ミス（失敗）を過度に気にする傾向（失敗懸念）」、「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向（行動疑念）」の 4 下位尺度からなっていた。20 項目、6 件法であった。

Table 1
各条件における平均反応時間の基本統計量

			全体 (N = 72)		男性 (n = 32)		女性 (n = 40)	
			M	SD	M	SD	M	SD
成功関連語	定位条件	一致	625.2	113.6	595.1	111.8	649.2	110.6
		不一致	652.7	120.3	628.6	119.0	672.0	119.3
	解放条件	一致	641.5	108.4	619.2	110.5	659.3	104.6
		不一致	615.9	106.5	586.1	99.8	639.8	106.8
失敗関連語	定位条件	一致	623.7	117.7	604.4	133.3	639.1	102.7
		不一致	652.8	113.8	621.0	103.4	678.2	116.6
	解放条件	一致	656.0	107.5	625.3	111.5	680.5	98.8
		不一致	623.5	106.2	598.1	107.9	643.7	101.6
中性条件	定位条件	一致	629.2	101.2	600.4	93.6	652.3	102.1
		不一致	655.0	107.8	626.9	110.9	677.6	101.1
	解放条件	一致	656.5	112.2	626.5	123.9	680.5	96.8
		不一致	624.8	108.1	599.2	109.4	645.3	103.9

注) M は平均値, SD は標準偏差を示す。「一致」は有意味語側に標的刺激が呈示された一致条件を示し,「不一致」は無意味つづり側に呈示された不一致条件を示す。

手続き

実験参加者は修正ドット・プローブ課題についての説明を受けた後, 練習試行を 16 試行実施した。練習試行の刺激語は, 本試行への影響を避けるために, 1 から 7 の整数がランダムに対呈示された。その後, 本試行が 2 つのセッションに分けて実施された。前半のセッションと後半のセッションではそれぞれ 96 試行が行われ, セッションの間には 1 分間の休憩が設けられた。修正ドット・プローブ課題終了後, 実験参加者は, 質問紙に回答した。

なお, 本研究では, 先に認知行動実験の課題を行い, その後, 質問紙を実施した。質問紙では比較的安定した完全主義パーソナリティを測定したが, 実験課題では, より影響を受けやすい反応時間を測定した。完全主義についての項目を複数読むような質問紙を先に実施した場合, 実験課題に対して大きな影響を与える可能性が高い。実際に, 牟田・越川 (2015) は, 質問紙を実験の前に実施することによって, その後の実験結果に影響を与えることを報告している。このことから, 質問紙を後に実施した。

装置

実験ではパナソニック社のノートパソコンが用いられた。このパソコンは, 12.1 型ワイド TFT カラー液晶のモニター (1,600 × 900 ドット, リフレッシュレート 60 Hz) と, 通常の QWERTY 配列のキーボードを備えていた。

修正ドット・プローブ課題の作成・呈示には,

Millisecond 社の Inquisit 4 が用いられた。

実験参加者とモニターとの距離は, Grafton et al. (2016) を参考に, およそ 60 cm になるように設定した。また, 画面の中心から刺激の中心までの視角は, およそ 10°であった。

倫理的配慮

実験参加者には, 実験への参加の自発性・任意性の保証, 回答内容に関する匿名性の保証, 研究への不参加・実験の中断に不利益がないことの保証を明記した研究同意書を示し, 口頭でも説明した上でサインを求めた。また, 実験終了後に不快な情動を経験しなかったかの確認を行った上, 実験者の連絡先を伝え, 問題が生じた場合には問い合わせるように求めた。

なお, 本研究は, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科の倫理委員会の審査を経ており, 承認を得ている。なお, 承認を受けた年月日は 2016 年 10 月 21 日であり, 承認番号は「16-869」である。

結果

修正ドット・プローブ課題に関する結果

反応時間データの処理 最初に, 修正ドット・プローブ課題により, 各実験参加者について得られた 192 試行分の反応時間データのうち, 誤答を分析から除外した。また, 誤答数が全試行の 10% に当たる 19.2 を超える実験参加者が男性に 1 名, 女性に 2 名いたため, データの信頼性を確保するために実験から除外した。この 3 名を除外した 72 名の誤答率は平均で約 4.2%

Table 2
選択的注意バイアス指標の基本統計量

		全体 (N = 72)		男性 (n = 32)		女性 (n = 40)	
		M	SD	M	SD	M	SD
成功	定位	1.74	80.84	6.93	73.47	-2.41	87.00
	解放困難	6.09	80.90	-5.81	96.07	15.61	66.10
失敗	定位	3.33	99.86	-9.81	113.53	13.84	87.50
	解放困難	-0.87	81.49	0.12	64.49	-1.67	93.71

注) M は平均値, SD は標準偏差を示す。

Table 3
MSPS の下位尺度得点の基本統計量

	全体 (N = 72)			男性 (n = 32)			女性 (n = 40)		
	M	SD	α	M	SD	α	M	SD	α
完全性欲求	3.47	0.79	.81	3.29	0.69	.76	3.61	0.85	.83
高目標設定	3.74	1.73	.76	3.82	0.66	.69	3.68	0.78	.79
失敗懸念	3.01	0.65	.65	2.96	0.60	.64	3.06	0.69	.66
行動疑念	4.07	0.90	.76	4.09	0.65	.61	4.05	1.07	.81

注) M は平均値, SD は標準偏差, α は Cronbach の α 係数を示す。

であった。次に、坪田・石井・野口 (2016) や坪田・石井 (2017) を参考にし、実験参加者ごとに、各条件の反応時間の平均値 $\pm 3SD$ より外にあるデータを外れ値として除外した。平均値 $\pm 3SD$ より外にあるデータが正規分布において出現する確率は約 0.28% であり、反応時間の外れ値検出の基準としてよく用いられるため、この基準は妥当であると考えられる。また、外れ値として除外されたデータの割合は、平均 0.84% ($SD = 0.74$, range 0 — 3.13) であり、極端に外れ値の多い実験参加者はいなかった。

これらの処理を加えた上で、各実験参加者の各条件の平均反応時間 (RT) を、その実験参加者の各条件における反応時間の代表値とした。

平均反応時間の基本統計量 各実験参加者の各条件の平均反応時間の平均値と標準偏差を、データ全体について、ならびに男女別に算出した。その結果を Table 1 に示した。

選択的注意バイアスの指標 個人の選択的注意バイアスの度合いを検討するために、Rudaizky et al. (2014) を参考に、定位バイアス指標、解放困難バイアス指標を算出した。指標は、以下の計算式によって、個人ごとに求められた。

成功 - 定位バイアス指標 = (「成功 - 定位 - 不一致条件」の RT - 「成功 - 定位 - 一致条件」の RT) - (「中性 - 定位 - 不一致条件」の RT - 「中性 - 定位 - 一致条件」の RT)

成功 - 解放困難バイアス指標 = (「成功 - 解放 - 不一致条件」の RT - 「成功 - 解放 - 一致条件」の RT) - (「中

性 - 解放 - 不一致条件」の RT - 「中性 - 解放 - 一致条件」の RT)

失敗 - 定位バイアス指標 = (「失敗 - 定位 - 不一致条件」の RT - 「失敗 - 定位 - 一致条件」の RT) - (「中性 - 定位 - 不一致条件」の RT - 「中性 - 定位 - 一致条件」の RT)

失敗 - 解放困難バイアス指標 = (「失敗 - 解放 - 不一致条件」の RT - 「失敗 - 解放 - 一致条件」の RT) - (「中性 - 解放 - 不一致条件」の RT - 「中性 - 解放 - 一致条件」の RT)

感情価のない中性語に比べ、完全主義関連語に対して、より強い定位バイアス・解放困難バイアスを示すほど、これらの指標はより大きな値をとる (Rudaizky et al., 2014)。

定位バイアス指標、解放困難バイアス指標の平均値と標準偏差をデータ全体、ならびに男女別に算出し、その結果を Table 2 に示した。

質問紙尺度に関する結果

質問紙によって測定した MSPS の下位尺度ごとの平均値を下位尺度得点とした。Cronbach の α 係数を下位尺度ごとに算出したところ、男性の行動疑念の α 係数が低かった。項目 12「納得できる仕事をするには、人一倍時間がかかる。」は、「そもそも納得できる仕事をするのではない」と考えた場合にも低く評定する可能性があり、実際に、他の行動疑念の項目と負の相関を示していた。そこで、項目 12 を削除したところ、男性の行動疑念の α 係数は、.61 まで改善した。MSPS

Table 4
完全主義と選択的注意バイアスとの相関係数

		成功		失敗	
		定位	解放困難	定位	解放困難
全体	完全性欲求	.06 [-.17, .29]	-.20 [-.41, .03]	.07 [-.16, .30]	-.10 [-.33, .13]
	高目標設定	-.08 [-.30, .16]	-.06 [-.29, .17]	-.01 [-.24, .22]	-.04 [-.27, .19]
	失敗懸念	.15 [-.08, .37]	-.12 [-.34, .11]	.20 [-.03, .42]	.02 [-.21, .25]
	行動疑念	.30 * [.08, .50]	-.10 [-.32, .14]	.21 [-.02, .42]	-.19 [-.40, .05]
男性	完全性欲求	.18 [-.18, .50]	-.25 [-.55, .11]	.01 [-.34, .36]	-.04 [-.38, .32]
	高目標設定	-.12 [-.45, .24]	.04 [-.31, .38]	-.10 [-.43, .26]	.36 * [.01, .63]
	失敗懸念	.11 [-.24, .44]	-.10 [-.44, .25]	.37* [.03, .64]	.17 [-.19, .49]
	行動疑念	.49 ** [.17, .72]	-.13 [-.46, .23]	.31 [-.04, .60]	-.14 [-.46, .22]
女性	完全性欲求	.02 [-.30, .33]	-.24 [-.51, .08]	.08 [-.24, .38]	-.13 [-.43, .19]
	高目標設定	-.06 [-.37, .25]	-.14 [-.43, .18]	.09 [-.23, .39]	-.23 [-.50, .09]
	失敗懸念	.19 [-.13, .47]	-.17 [-.46, .15]	.05 [-.27, .35]	-.05 [-.36, .27]
	行動疑念	.23 [-.09, .50]	-.09 [-.39, .23]	.18 [-.14, .46]	-.20 [-.48, .12]

注) [ ] 内は 95% 信頼区間を表す。

** $p < .01$, * $p < .05$

については、内的一貫性にそれほど大きな問題は報告されていないことから、本研究では、項目 12 を除いた 4 項目の平均値を、行動疑念の下位尺度得点とした。その上で、下位尺度ごとの平均値、標準偏差、Cronbach の α 係数をデータ全体、男女別に算出し、その結果を Table 3 に示した。

選択的注意バイアスと MSPS の下位尺度得点との関連

MSPS で測定した完全主義の下位尺度得点と、修正ドット・プロープ課題で測定した選択的注意バイアスの指標の間の Pearson の積率相関係数をデータ全体について算出した。また、男女別にも同様に算出し、その結果を Table 4 に示した。データ全体については、行動疑念と成功 - 定位バイアス指標の間 ($r = .30$) の相関が 5% 水準で有意であり、行動疑念傾向が強いほど、成功関連語への定位バイアスが大きかった。男性については、高目標設定と失敗 - 解放困難バイアス指標の間 ($r = .36$)、失敗懸念と失敗 - 定位バイアス指標の間 ($r = .37$) の相関が 5% 水準で、行動疑念と成功 -

定位バイアス指標の間 ($r = .49$) の相関が 1% 水準で有意であった。すなわち、男性の場合は、高目標設定傾向が強いほど失敗関連語からの解放困難バイアスが大きく、失敗懸念傾向が強いほど失敗関連語への定位バイアスが大きく、行動疑念傾向が強いほど成功関連語への定位バイアスが大きかった。女性については、有意な相関は見られなかった。

なお、仮説とは異なり、男性において、高目標設定と失敗 - 解放困難バイアスに正の関連が見られたことから、男性のみのデータで、失敗 - 解放困難バイアス指標を従属変数とし、完全主義の下位尺度の交互作用項を入れる前後について階層的重回帰分析を行った。その結果、交互作用項を独立変数に加えることによる決定係数の増分は有意ではなく ($\Delta R^2 = .14$, $p = .58$)、自由度調整済み決定係数は、.13 から .09 に低下した。また、主効果モデルにおいて、高目標設定の標準偏重回帰係数は、相関係数と同様に正の値であった。

考 察

本研究の目的は、修正ドット・ブローブ課題を用い、成功関連語と失敗関連語への定位バイアス・解放困難バイアスと、完全主義との関連を検討することであった。

定位バイアス・解放困難バイアスと完全主義との関連 (全体)

データ全体については、行動疑念と成功・定位バイアス指標の間にのみ正の相関が見られ、完全性欲求については、いずれの選択的注意バイアスとも関連が見られなかった。そのため、仮説 1 は支持されたが、仮説 2—4 は支持されなかった。

しかし、この結果は、後述するように、選択的注意バイアスと完全主義との関連が性別によって大きく異なるにもかかわらず、男女のデータを併合して分析しているためにもたらされたものであると考えられる。全体のデータで見られた行動疑念と成功・定位バイアス指標の間の正の相関についても、男性で特に強く見られた相関が、女性のデータと併合することによって若干弱められたものであると考えられる。坪田・石井 (2017) において、性別によって選択的注意バイアスと完全主義との関連が異なることが示唆されていることも一致している。そのため、性別を考慮しない全体のデータにおける関連は、現象を適切にとらえていない可能性があり、その解釈に慎重になる必要がある。

定位バイアス・解放困難バイアスと完全主義との関連 (男性)

男女別でデータを分割し、定位バイアス指標・解放困難バイアス指標と MSPS の各下位尺度との相関分析を行ったところ、男性と女性で異なる相関行列のパターンが見られた。

男性については、MSPS の各下位尺度得点の高低によって、成功関連語や失敗関連語への選択的注意バイアスが、以下のように様々な点で異なることが示唆された。

完全でありたいという欲求 (完全性欲求) との関連

完全性欲求と成功関連語・失敗関連語への選択的注意バイアスとの関連は見られなかった。そのため、男性のデータについても、仮説 1 は支持された。

完全性欲求は完全主義の基本的な特徴ではあるものの、適応に影響しない側面であると想定されている。実際に、桜井・大谷 (1997) でも、抑うつや絶望感と関連が見られなかった。また、完全主義者の持つ選択的注意バイアスが不適応につながる (Shafran et al., 2002) ことと合わせて考えれば、「できる限り、完璧であろうと努力する」といった完全主義の基本的特徴自体は、選択的注意バイアスを生じさせることなく、

不適応的ではないことが示唆された。

自分に高い目標を課する傾向 (高目標設定) との関連 高目標設定と失敗・解放困難バイアス指標との間に正の相関が見られた。そのため、仮説 2 は支持されなかった。

仮説とは異なり、高目標設定と失敗・解放困難バイアスに正の関連が見られた。しかし、他の完全主義の下位尺度を統制した上で検討すれば、異なる結果が得られる可能性がある。また、たとえば、失敗懸念が高い人の高目標設定と失敗懸念が低い人の高目標設定では、異なる機能をもつ可能性も考えられる。そこで、他の下位尺度を統制した上での検討、ならびに完全主義の下位尺度得点の交互作用効果について検討を行うため、失敗・解放困難バイアス指標を従属変数とし、交互作用項を入れる前後について階層的重回帰分析を行った。しかし、交互作用は見られず、他の完全主義の下位尺度を統制した上で検討しても、結果は変わらなかった。

このことから、高目標設定は、完全主義の適応的な側面として概念化されているが、失敗から注意をそらすことが困難であるといった不適応的であると考えられる選択的注意バイアスを導き、認知的なレベルでは不適応的にはたらくことが示唆された。しかし、桜井・大谷 (1997) や清水・古井 (2004) などの様々な先行研究において、高目標設定の適応的なはたらきが報告されている。そのため、高い目標を設定し、達成に向かって努力し、目標を達成するといった、行動レベルで高目標設定が適応的にはたらいっている可能性がある。また、失敗から注意をそらすことができず、悔やむからこそ、高い目標に向かって努力をすることができる可能性も考えられる。

ミス (失敗) を過度に気にする傾向 (失敗懸念) との関連 失敗懸念と失敗・定位バイアス指標との間に正の相関が見られた。そのため、仮説 3 は部分的に支持された。

失敗懸念の尺度項目の内容は、「ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう」、「人前で失敗することなど、とんでもないことだ」といったものであり、失敗を悔やむというよりは、失敗を過大にとらえ、恐れるといったものになっている。そのため、失敗懸念が高い人は、失敗から注意をそらすことが困難なのではなく、失敗していないかを注意深くモニタリングし、結果としてささいな失敗に対して注意を向けてしまい、不適応に陥ることが示唆された。Shafran et al. (2002) は、Frost et al. (1997) の結果をもとに、失敗懸念と選択的注意バイアスとは無関係であろうと主張していた。しかし、この結果から、男性に関しては、失敗懸念は失敗への定位バイアスと関連があることが示され、Shafran et al. (2002) のこの主張は、部分的に誤りである可能性が実証的に示唆された。

自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向（行動疑念）との関連 行動疑念と成功・定位バイアス指標との間に正の相関が見られた。そのため、仮説4は支持されなかった。

行動疑念は完全主義の不適應的な側面であるが、成功に対する定位バイアスとの関連が見られた。そのため、認知レベルでは、行動疑念は適応的にはたらくことが示唆された。一方、有意ではないものの、失敗・定位バイアス指標とも.31の相関を示しており、一概に適応的な側面ばかりではないと考えられる。また、成功に注意が向きやすいことが適応的であるかは判然としなない。行動疑念が高い人が、成功・失敗の両方に対して定位バイアスを持つとすると、物事が成功しているか、失敗しているかを注意深くモニタリングしており、完全主義者の設定する高い目標と相まって、結果として失敗を多く経験することになり、不適應に陥る可能性が考えられる。

定位バイアス・解放困難バイアスと完全主義との関連（女性）

女性のみのデータでは、MSPSの下位尺度得点と、選択的注意バイアス指標の間に相関が見られなかった。そのため、女性のデータに関しては、仮説1は支持されたが、仮説2—4は支持されなかった。すなわち、女性の完全主義傾向は、選択的注意と関連していない可能性が示唆された。

結論と今後の課題

本研究では、修正ドット・プローブ課題を用いることによって、定位バイアスと解放困難バイアスを弁別して測定し、完全主義との関連を検討した。その結果、定位バイアス・解放困難バイアスの両方と関連を示したMSPSの下位尺度はなかった。これまでの方法では、完全主義が選択的注意バイアスと関連していることがわかっていても、定位バイアスと解放困難バイアスのいずれと関連しているかが判然としなかった。だが、本研究により、完全主義の側面によって、それぞれが異なる形で関連していることが明らかになり、より精緻に完全主義と選択的注意バイアスの関連を検討することができたと考えられる。

また、今回の研究では、男性のみのデータでは、高目標設定と失敗からの解放困難バイアスの間、失敗懸念と失敗への定位バイアスの間、行動疑念と成功への定位バイアスの間に関連が見られたが、女性では完全主義と選択的注意バイアスとの関連は見られなかった。そのため、完全主義と選択的注意バイアスの関連が性別によって異なることが示唆された。この結果は、坪田・石井（2017）の結果と一致しており、選択的注意バイアスを、定位バイアスと解放困難バイアスとに弁別して検討しても、男女で関係が異なるという結果

が得られた。対人場面における完全主義関連語に対しても、女性の完全主義者が選択的注意バイアスを示さなかった（坪田他, 2016）ことを考慮すると、選択的注意バイアスを示すのは男性の完全主義者のみで、女性の完全主義者は選択的注意バイアスを示さないことの蓋然性が高まったと考えられる。

女性の完全主義者に選択的注意バイアスが見られなかった原因については、生得的で生物学的な問題というよりは、性別と共変する何らかのパーソナリティ変数や社会的変数の問題である可能性が高いと考えられる。たとえば、坪田・石井（2017）が提案したように、女性特有の性役割に由来すると考えられてきた「成功恐怖」は、考へる原因の1つであると考えられる。成功恐怖とは、競争や成功に伴う負の感情であり、女性は成功への努力によって、競争的、攻撃的であるとみなされ、社会的に拒絶されるのではないかと懸念する。この懸念が葛藤と不安を呼び起こし、成功を望むと同時に成功を恐れることになる（Horner, 1968）。成功恐怖傾向の高い女性にとって、成功や失敗という事象は、複雑な意味を持つことになり、それらに対する選択的注意バイアスのはたらく方も異なってくる可能性がある。しかし、この要因は性別と深く関係するものの、全ての女性に成功恐怖が見られるわけではなく、男性に見られないわけでもない。すなわち、成功恐怖は女性にのみ発現する生得的なものではなく、女性に成功恐怖を促すような社会環境によって形成される部分が大きい。そのため、女性の完全主義者が選択的注意バイアスを示さないというよりは、成功恐怖のような女性に特に強く見られるパーソナリティ特性や社会的な変数によって、完全主義と選択的注意バイアスの関係が調整され、関連が見られなくなっていると考えられる。そのため、このように性別と共変し、完全主義と選択的注意バイアスとの関係を調整する変数を特定することが今後必要となる。

本研究では、認知行動実験パラダイムのみを用いているため、完全主義者がどのように認知し、それを基にしてどのように行動するかといった関係が明らかになっていない。そのため、今後の研究では、より現実場面に近い実験室実験などを用いる必要があるだろう。たとえば、課題を行わせ、その成績について褒める内容と批判する内容の入り混じった評価文章を呈示し、その文章のどこに注目するかの視線測定を行ったり、評価文章の再生を行わせたりして、選択的注意バイアスを測定するなどの方法が考えられる。このような方法と、認知行動実験パラダイムとを併用し、完全主義者の認知、行動、適応の関係を明らかにする必要があるだろう。

利益相反

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事

項はない。

引用文献

- Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (2002). Perfectionism and maladjustment: An overview of theoretical, definitional, and treatment issues. In G. L. Flett & P. L. Hewitt (Eds.), *Perfectionism: Theory, research, and treatment* (pp. 5–31). Washington, DC: American Psychological Association.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., & Mosher, S. W. (1991). Perfectionism, self-actualization, and personal adjustment. *Journal of Social Behavior & Personality*, 6, 147–160.
- Frost, R. O., Marten, P. A., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449–468.
- Frost, R. O., Trepanier, K., Brown, E. J., Heimberg, R., Juster, H. R., Makris, G. S., & Leung, A. W. (1997). Self-monitoring of mistakes among subjects high and low in perfectionistic concern over mistakes. *Cognitive Therapy and Research*, 21, 209–222.
- Grafton, B., Southworth, F., Watkins, E., & MacLeod, C. (2016). Stuck in a sad place: Biased attentional disengagement in rumination. *Emotion*, 16, 63–72.
- Horner, M. S. (1968). *Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation* (Unpublished doctoral dissertation). University of Michigan, Ann Arbor, MI.
- Kobori, O., & Tanno, Y. (2012). Self-oriented perfectionism and its relationship to selective attention: An experimental examination using social cognitive paradigm. *Japanese Psychological Research*, 54, 418–423.
- Lundh, L., & Öst, L. (1996). Stroop interference, self-focus, and perfectionism in social phobics. *Personality and Individual Differences*, 20, 725–731.
- MacLeod, C., Mathews, A., & Tata, P. (1986). Attentional bias in emotional disorders. *Journal of Abnormal Psychology*, 95, 15–20.
- Mathews, A. (1990). Why worry? The cognitive function of anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, 28, 455–468.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1985). Selective processing of threat cues in anxiety states. *Behaviour Research and Therapy*, 23, 563–569.
- 松下 達彦 (2011). 日本語を読むための語彙データベース (VDRJ) Ver. 1.11 (研究用) 松下言語学習ラボ Retrieved from <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html> (2018 年 5 月 20 日)
- 牟田 季純・越川 房子 (2015). 質問紙法による気分測定が実験結果に与える影響——「自己注目理論」と「観測問題」の視点から—— 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 16.
- Posner, M. I. (1980). Orienting of attention. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 32, 3–25.
- Posner, M. I., & Petersen, S. E. (1990). The attention system of the human brain. *Annual Review of Neuroscience*, 13, 25–42.
- Rudaizky, D., Basanovic, J., & MacLeod, C. (2014). Biased attentional engagement with, and disengagement from, negative information: Independent cognitive pathways to anxiety vulnerability? *Cognition and Emotion*, 28, 245–249.
- 桜井 茂男・大谷 佳子 (1997). 「自己に求める完全主義」と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68, 179–186.
- Shafan, R., Cooper, Z., & Fairburn, C. G. (2002). Clinical perfectionism: A cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 773–791.
- 清水 光栄・古井 景 (2004). 職域における抑うつと完全主義との関係について 産業衛生学雑誌, 46, 173–180.
- 田島 ますみ・佐藤 尚子・橋本 美香・松下 達彦・笹尾 洋介 (2016). 日本人大学生の日本語語彙量測定の試み 中央学院大学人間・自然論叢, 41, 3–20.
- 坪田 祐基・石井 秀宗 (2017). 完全主義と選択的注意の関連の検討——ドット・プローブ課題を用いて—— パーソナリティ研究, 26, 49–60.
- 坪田 祐基・石井 秀宗・野口 裕之 (2016). ドット・プローブ課題を用いた完全主義と選択的注意との関連の検討——対人場面完全主義関連語を用いて—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 63, 47–56.
- 梅本 堯夫・森川 弥寿雄・伊吹 昌夫 (1955). 清音 2 字音節の無連想価及び有意度 心理学研究, 26, 148–155.

—— 2018. 3. 23 受稿, 2018. 9. 15 受理 ——